特選ブログ
shin1さんの日記
Vol.47

人間牧場主・年輪塾々長
若松　進一

図書館があったらなあ～

一冊の本との出逢いが人間の運命を変える

私が「図書」という言葉に出会ったのは、小学校5年生の時でした。私は余り勉強ができなかったので級長にはなれませんでしたが、学級みんなの総意で図書委員になり、何と校内図書委員会の委員長になったのです。委員長といっても別に権限がある訳でもなく、休み時間や放課後を利用して図書室の掃除をしたり、本の整理や貸出しをすることが主な仕事でした。家が貧乏だったため本といえば教科書だけで、本など買って貰ったこともなかったのに、図書室には数字番号で棚毎に整理された、今まで見たこともない本がずらりと並んで、まるで夢の世界を見ているような錯覚に陥りました。

それからは、それまで戸外がフィールドだった私の遊びは一変し、図書室に図書委員長の権限？で暇さえあれば入って、まるで水を得た魚のように片っ端から本を読み漁りました。不思議なもので、読書の影響でしょうか、あれほど嫌いだった算数や国語、社会、理科などにも興味が湧きはじめ、大したことはありませんでしたが成績も見違えるように上がって行きました。私の変化を見ていた担任のT先生は、時々図書室を訪れ、「この本を読んだら」と勧めてくれるようになりました。

私は昭和19年10月3日に生まれています。小学校5年生の10月3日誕生日の日、授業を終えいつものように図書室に入ると、机の上に新聞紙にくるんだ1冊の本が置いてあり、「若松進一君、お誕生日おめでとう。ささやかながらあなたの愛読している本をプレゼントします。これからも頑張ってください。T先生より」と達筆の墨字で書いていました。新聞を剥がすと中から井伏鱒二作「ジョン萬次郎漂流記」という真新しい本が出てきました。それまで誕生日のプレゼントなど貰ったことのなかった私は、天にも昇る気持ちでした。私はこの本を大事に持ち帰り、手垢ですり切れるほど読みました。後にわが家のみかん畑のある池久保の150年を超えるヤマモモの木の根元の祠に、愛用のハーモニカとともに隠して、野良仕事を手伝った休み時間に取り出し、読んだり吹いたりして時を過ごしましたが、この畑に人間牧場を造るべく50年ぶりに訪れた時、すっかり忘れていた祠を掘り返すと、土に還って腐り、背表紙だけになっていた「ジョン萬次郎漂流記」というT先生から貰った本とともに、ハーモニカのかけらが出てきて、ビックリ仰天大きな感動を覚えました。

私はこの1冊の本の主人公ジョン萬次郎を目標に、「大きくなったらアメリカへ行きたい」という夢を持ちましたが、そのお陰で総理府派遣第10回青年の船に班長として乗船し、本当に太平洋を渡り建国200年のアメリカへ行けたのですから、本の影響は絶大だと思います。

電子図書の時代ながら田舎は図書館難民

私はこれまで、凡人ながら折々に書き貯めた文章をまとめて自費出版してきました。「昇る夕日でまちづくり」「今やれる青春」「夕日徒然草・地の書・水の

書・火の書・風の書・空の書・心の書」「ミレニアム2000年その日私は」などですが、本は読むものながら、本を書くことによって、読む人の気持ちがよく分かるような気がするのです。ある日のこと同じ町内に住む元地域おこし協力隊の冨田さんが、「若松さんの本を自炊し電子図書にしてあげる」と言ってくれました。手始めに「夕日徒然草」6冊を電子図書にしてもらい、手持ちのタブレットに内蔵し、愛用の木になるカバンに入れて軽々と同行2人の旅を続けています。世は活字離れやペーパーレス時代とよく言われていますが、日頃パソコンでデジタル本を読む度に電子図書の時代がやって来たことを痛感するのです。しかし私のような活字に飢えながら幼・少・青・成年代を生きて来た人間にとって活字本は、多分死ぬまで心のよりどころとなることでしょう。

私の住んでいる地域には残念ながら本屋さんも図書館もありません。幸いその気になればパソコンのアマゾンで注文すれば直ぐにお目当ての本を買うことができますが、これほど時代が進んでも、子どもの頃から本に親しむ機会はそんなに多くはありません。学校に図書室があり、学校は「本を読むこと」や「人の話を聞くこと」、「知らないところを見ること」によって人間力を高めようと、とりわけ本を読む習慣を身につけさせるべく、朝読・10分間読書などの運動を行っていますが、学校の図書室も限られた予算故に、図書購入も思うに任せないのが正直なところです。一方町内には図書館もなく、図書に対する町民の意識は低いままで、そんなに多くない古びた蔵書しかない地域事務所の2階の図書室へ来て、本を読むような人も少なく、本に想いを寄せる人たちが小さなグループを立ち上げ、あの手この手でやってはいるものの、このままだと本屋難民・図書館難民のそしりを免れることはできないのです。

図書館が変わる

図書館はこれまで、行政が文化行政の一環として設置運営してきました。故に市民の意識と設置している行政の思い込みに大きなズレが生じ、せっかく造った施設にも関わらず、利用率の低迷している図書館が幾つもあるようです。そんな中で図書館をいい方向に変えようというまちづくりの動きが市民運動となり、中にはノウハウを持った本屋さんが行政に替わって図書館を営業運営したり、市民が利用しやすいようにショッピングモールと同居する複合施設まで現れ始めています。また図書館が様々な企画展や図書に関わるグループと提携して研修会を企画実施するなど、今までの図書館の暗いイメージとは全く違った活気のある施設に生まれ変わっている所もあり、図書館の元気な街は市民の知的好奇心も高く、図書館は今後もまちづくりの大きなテーマになりつつあるようですが、やはりいい図書館には良い人ありといったところでしょうか。

「一冊の　本との出会い　人間の
運命変える　私でさえも」
「本読めば　本が書きたく　なりにけり
凡人ながら　自著本七冊」
「中央に　立派な図書館　あるけれど
行けない人は　どうすりゃいいの」
「その昔　ペギー葉山が　歌ってた
学生時代　遠い記憶に」
（若松進一の笑売啖呵）